

# 都立片倉 (西東京)

最高の環境で行う、密度の濃い練習で磨かれた堅い守りと得点力のある打線。そして受け継がれる諦めない気持ちを発揮し“片倉新時代”を築く。



部室からグラウンドに降りる石階段を野球道具と野球ノットを持って選手達が降りる。グラウンドに元気の一礼。練習が始まると笑顔を浮かべながらも真剣に一球一球のノックと打撃練習に集中する選手達。ひとつひとつのプレーを説明しながらノックを打つ監督。和やかながらも濃密な時間がそこには流れている。

彼らは昨夏西東京大会でベスト16に進出するなど急激に力を付けてきている都立片倉高校。  
率いる宮本秀樹監督は東京学芸大付、野津田、東大和、府中工などの部長・監督として約30年のキャリアを持つ。東大和では伝説的な指導者と言われる故・佐藤道輔氏の下で選手を指導し、府中工では都立出身のプロ野球選手である高江洲拓哉氏(元中日)も指導した。

その経験から色々な人間との繋がりがあふれている。トレーニングや技術面のコーチが練習をサポート。練習試合では県立岐阜商業(岐阜)、丸子修学館(長野)といった強豪校などを含め「勉強になる部分が多いチーム」(宮本監督)と多く試合を行う。「やれることは全てやる。相手から良い所を学ぶ」というモットーを実践している。そういった環境もあってか都立高校ながら真剣に野球に取り組みたいと選手が集まるようになってきた。

得点パターンの多い打線と失点の計算が出来る2枚看板

今の3年生は宮本監督が赴任して

からずつと見てきている。そのため監督の言いたいことが伝わっているチームだ。昨年の夏に名門・県立岐阜商業と練習試合を行い、大量点を取られて敗れた。また秋の都大会では二松学舎大付に0-7と完敗を喫した。しかしそこから「色んな点の取り方がある」と参考にし、「打てない」という弱点を認識し冬場は5面プラス1面、計6面にゲージを置いての打撃練習をするなど得点力・打撃力向上に時間を割いた。

その結果、春の都大会では秋4強の都立昭和を6-0で下し、二松学舎大付相手に5-6と接戦を演じるまでになった。その試合で「自分達はやれるんだ」という自信につながったという。それから夏にかけては疲れも出た。しかしその間に控え選手達が大きく成長。「試合で使える選手が増え、スタメンの入れ替えもあるかも」と言うほどチームの層が厚くなってきた。

二松学舎大付の最速147キロの好投手・鈴木投手相手に二桁安打を放った打線は強力だ。この試合3安打の沖辺選手、本塁打を放った中島選手ら中軸を中心に、速い球・変化球にも対応でき連打が出る。左打者・足の速い選手がスタメンに名を連ね、「その時一番点の取れそうな方法で攻める」ように得点のパターンは多い。練習では長打よりも引き付けて強い打球を打つことを重点に取り組んでいる。

守備は右下手の後藤投手、右上手の星野投手の2枚看板を中心に堅い。「練習試合で強い所と試合をしても





右上ノックを打ちながら選手の動きをチェックする宮本監督。

左上ノ投球練習をする後藤投手。下手から豊富な球種を操る投球は安定感抜群。

左ノ打撃練習をする選手達。速い打球が野手の間を抜けていく。また、後ろのフェンスやベンチを神宮球場を意識して水色に。このような所からも「やれることは全てやる」というモットーが伺える。

ビッグイニングを作られることがほとんどない」というように失点が計算できる。後藤投手は春の都大会で都立昭和を3安打で完封し、星野投手は秋の二松学舎大付戦ではリリーフして相手打線を抑えている。

後藤投手はカーブ、スライダー、シンカー、チェンジアップなど多くの変化球を持つ。向上心の高い選手でプラスになると思ったことは楽しんで取り組みどんどん吸収していく。変化球をすぐにモノにしてしまうなど器用さと身体能力の高さも持ち合わせ、走者に走られないよう独特の牽制方法も身に付けた。

星野投手はインコース・アウトコースの際どい所に投げ分けが出来る、コントロールの良い投手。中学時代から多くの登板を経験しているため、ピンチになっても落ち着きがあり「安心して見ていられる」と宮本監督の信頼も厚い。

### 受け継がれる、片倉イズム

片倉では2・3年生が1年生にノックを打つなど指導を行っている。そして上級生が率先して用意片づけを行い、キャッチボールの時は多くの上級生はホームベースから遠く離れた外野のネット沿いで行っている。

これは「強い人が弱い人をカバーする」という故・佐藤氏の哲学や宮本監督の考え、そして

昨年の3年生20名の姿勢を現在の選手が引き継いでいる。昨年の3年生は前の監督から宮本監督に変わった過渡期を経験し、新生片倉高校の土台作りを担い多くの苦労を経験した学年。しかし誰も辞めることなく野球部を続けた。今も練習に手伝うためにグラウンドに顔を出す生徒も多く、「将来、社会科の先生で野球の指導者になりたい」という生徒もおり宮本監督は「何よりも嬉しいこと」と話す。

彼らの姿を焼き付けた上で成長を見せる選手も多い。控えの副主将は以前はただのお調子者で監督に怒鳴られることも多かったが、現在はその明るい性格でチームを支え1年生の気合いが入っていない時などは率先して指導するようになった。

昨夏の早大学院戦の4点ビハインドで迎えた9回二死、3年生の中心選手がカウント2ー3から際どいボールを選び次に繋げる姿勢を見せた。その試合は彼らの最後の試合になってしまったが、現在の選手達はそれを引き継ぎ、秋・春の大会では最後まで諦めることなく相手に食らいついた。

宮本監督はチームの今後について「チームが成長していく過程を府中で経験したことが今活きている。自分の想像以上に早かったが、このように土台がしっかりと戦えるチームが出





上 / 都立片倉高校のグラウンド。八王子市片倉ののどかな街並みの中にあり、都立高校としては最高と紹介され秋の大会ではブロック予選で使われるほど。選手達はここで日々野球技術の向上に努めている。  
 右 / 下級生の選手にノックを打つ上級生の選手。色々と注意をするだけでなく、自分達もしっかりした行動を示すことによって下級生を引っ張っていく。



野球部の機関誌「片倉」  
 宮本監督のコメントや引退した昨年の3年生など選手達の作文、野球ノートからの抜粋、選手達の短歌など掲載項目は様々。  
 選手達の心の成長を促すとともに、生徒を預けている保護者からの評判も上々だという。

来ることは想像していた。ただもっと上に行くためには私も成長していかなければいけないし、どうしていくか常に考えていかなければいけない。身近では全国大会で金賞常連の吹奏楽部のような強いチームは参考になることが多い」という。

その上でチームとしての目標は、「とにかく毎年成長していきたい。ここ最近の大会では、3回以上勝っているのをそれを継続させたい。その結果、相手がどこでも、いつも大会で上位に残れるチームになればいいし、そういった雰囲気を作れるチームでありたい。絶対に後退はしたくない」

そんな片倉高校の夏の大会初戦は、かつて宮本監督が率いていた都立東大和との対戦。「私にとって東大和に勝つことは大きな目標のひとつ。勝つことが出来れば私自身の成長にも繋がるような気がする」と語る。

日時は7月15日12時30分、球場は多摩一本杉球場となっている。